

読書の秋 楽しみ方いろいろ……

読書の秋。インターネットの掲示板「発言小町」に「どのように本を読んでいまずか」と尋ねる書き込みがあった。登場人物になりきって読む人もいれば、映画のように情景を思い浮かべて文体を味わう人もいる。多様な本の楽しみ方が寄せられた。



投稿主は、年間で120冊ほど小説を楽しむ。同じく読書好きの知人と話していて、「本の読み方の違いに初めて気付いた」とつづる。知人は文章を読むと「情景が浮かんでくる」のに対し、投稿主は「文字そのものが直接心に入ってくる感じ。ほとんど映像や情景は浮かばない」。他の人がどう本を読むのか興味が出て、質問を投げかけた。多かったのは、情景をイメージしながら読むタイプ。「ドラマやアニメのように登場人物が動き回る」「部屋のレイアウトまで詳細に」と場面を想像して読む人が目立った。「リアルなイメージが浮かぶので、ホラーや殺人事件の小説は読めない」という悩みも。映像だけではない。「土砂降りという言葉から土ほこりの匂いを感じる」「晩夏の午後とあると、セミの声や日差し具合まで想像してしまふ」「暑い、冷たい、重いといった体感も」と、匂いや音まで思い浮かぶ人もいるようだ。「登場人物が同じ女性ならその感情に、男性なら身近で話してくれるかのように感じながら」感情移入して読むといった声もあった。

情景イメージ ● 文字追う ● 同じ本読み返す

東京大学教授の酒井邦嘉さん(言語脳科学)は、「人は書き手の意図を理解するために想像力を働かせる。自分の経験を基に、様々な感覚のイメージを膨らませて、行間を読んだり、文体を楽しんだりできる」と話す。想像力の働かせ方は人それぞれに違い、読書は想像力を育む機会にもなるという。

投稿主と同じ文字を追うタイプの人からは「まるでタイ

ピングをするときのように入字が頭の中を流れていく」「単純に活字と文章が好き」といった意見が集まった。ミステリ小説を好む人からは「先が気になりイメージしている暇がない」。同じ本を何度も読む楽しみをつづった投稿もあった。20代の女性は「最初に速いスピードで読み終えて、後からじっくり読み直す」。子どもの頃に意味も分からず読んだ本

を大人になって読み返し、「当時想像していたものと実際に描かれている情景の違いにびっくりした」。年齢や経験を経たことで、文章から感じる内容も変わってくるようだ。ブックディレクターとして書店などに選書の助言をする

幅允孝さんは「何度も読むことで行間に自分の感情や考えを染みこませていくような感覚が楽しい」と、本を読み返すことを「読み重ねる」と表現する。「心に深くささる本があることは読書の幸せの一つ。読む場所や自身の状況でも感じ方が変わる。1冊の本と、とことん付き合うことは、自分自身を見つめることになります」と薦めている。



イラスト・山崎のぶこ